

ひとつの非文学的消息——ゲーテの隠し娘？アウグステ・ベーマーのこと

・・・エアハルト教授の検証・・・

西 川 富 雄

二〇〇〇年六月のこと、わたくしは、「国際シェリング協会」を通じての知人・ハノーヴァーの教授、エアハルト氏から、中封筒の郵便物を受け取った。そこには、最近こんな発見をしましたという簡単な手紙と、新聞記事の切り抜きコピーが同封されていた。

早速、お礼のことばと、シェリングとの関連であなたの「発見」には、大変興味を覚える、機会があればどこかで紹介したい旨、書き記して返事を出したところ、しばらく経って、詳細はこれを参考にしてみたいといと、エッセイにしては浩瀚にすぎるコピーが送り届けられてきた。それを一読して、この一文は、二〇〇一年に書いたものであるが、発表の機会もないままに今日に至っている。あまりにも偉大なゲーテの品位を落とすことになるのではないかという危惧の念もあつて放置していたのであるが、エアハルト教授との約束も気になって、今回、掲載の機会を与えていただいたのを幸いに、簡単な「消息」として発表する次第である。

アウグステ・ベーマー（Auguste Bömer）への私の関心といえは、シェリングの医論をめぐってである。彼女の死が、シェリングにとっては、医論をその自然哲学の中に位置づけることによって、いつそに、学問にまで高めようとするきっかけとなったという経緯があるからである。

アウグステが、疫痢で死んだのは、一八〇〇年七月二日、まだ一五歳になったばかりのことである。そのとき、アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲル夫人であつたその母・カロリーネは、すでにその前年頃から才気のほとばしる青年哲学者・シェリングに思いをよせ、シェリングはシェリングで、一一歳も年上の才媛に心惹かれるという間柄になつていたのである。

そのシェリングには、アウグステは、その母を通じて、もちろん、すっかり打ち融けるまでになつていた。すでに、新進気鋭の自然哲学者として名を馳せつつあつたシェリングは、当時ドイツ医学界に名を知られていたブラウン説にもよく通じていた。そのシェリングは、高熱に悩むアウグステのそばにあつて、医者の方々に異論を差し挟むこともあつたのである。やがて、当然ながら、彼女の死は、シェリングの学問・自然哲学への批難の声をもひき起こすことにもなった。世間の批難はあたらないにしても、おそらくは、シェリング自身にも、なんともできなかったことへの無力の思いが募つたにちがいない。それが、医論をみずからの自然哲学の中に位置づけて「学」にまで高めようというシェリングのモティーフを、いつそに強めたことは、いうまでもない。やがて一八〇六年には、かれは、『医の科学年報』を編集刊行するまでにいたっている。

そのアウグステの実の父が、ゲートであると推理するのが、エアハルト教授の「発見」である。それは、かならずしもワイドシヨウの興味から出てきたことではない。ヴュルツブルグから北へほぼ五〇キロにある小さな町、バート・ボックレトの公式のイヴェントで教授は、公開の講演を行っているのである。長らく埋もれていて苔むす碑に刻み込まれたレリーフ、そこに描かれている二匹の蛇の神話的解釈、カロリーネの手紙、A・W・シュレーゲルの舞台劇作品、『イーオン』、ゲートの劇曲作品『隠し娘 Die natürliche Tochter』（オイゲニー）、それに『ウエルテル』などを吟味、考証しながら、かれの推理は成立している。

そして、その全推理のかなめには、クラウスタールでの、カロリーネとゲートとの出会いがおかれている。それは、二人にとっては、どこまでも「秘密」のそれであるというにある。出合いは、一七八四年八月のこと、カロリーネ 二一歳、ゲート 三五歳のときである。当時のゲートは、鉱山学にも深い関心を示していたし、鉱山行政にも積極的なかわりを持っていた。才媛・カロリーネからすれば、憧れの人である。八月一〇日には、ゲートはクラウスタールにきていた。そして、憧れのひとの夜の食事や散策も楽しんだという。

さて、問題のアウグステはこの町で一七八五年四月二八日に、鉱山医で技師でもあったW・ペーマー（一七八八年死亡）との間に、カロリーネ夫人の長女として出生したことになる。ゲートとの二人の出合いが、どういふかたちでなされたか、推理小説風のフィクションの域を出ないものとも思われるが、医科学的には、妊娠は、八月上旬と計算されるらしい。

その一致は、おそらくは、偶然のものであって、そこから、実の父は、ゲートであるという、一見性急な推理が、どうして成立するのか、いささか疑問にも思えるのだが、エアハルト教授は、うえに挙げたような吟

味・考証から状況証拠は揃っているというのである。

わけでも、エアハルト教授によれば、すでに一七九九年來、A・W・シュレーゲル夫人であったカロリーネは、心惹かれるシェリングに、なお、死んだ娘・アウグステの兄であってほしい、私は、できたらあなたの母でありたい旨の手紙を書き送っているし（一八〇一年二月）、ゲートも精神的なつながりにおいて、あなたを父のような思いで愛しているとも書いているという。母としての秘密が、つい、本音を露わにしているのであるのか？ しかしいうまでもなく、秘密のヴェールははがされることもなく、カロリーネは、やがて、シェリング夫人となるのである。そのまえ一七九八年、二三歳のシェリングがイエナの員外教授に就くについては、すでにゲートの強力な推挽があつたのは歴史的に事実であるし、そして、カロリーネがA・W・シュレーゲル夫人であることを止める（一八〇三年）についても、ゲートの尽力がなくてはならなかった。

ここで、エアハルト教授の「発見」にいたる証拠立てを詳しく紹介する段取りになるのであるが、わたしには、それをいちいち追跡するほどの関心はないし、また力も余裕もない。ただ、いえることは、才媛・カロリーネは、ドイツ初期ロマン主義運動のなかで際立った光彩を放っていたのであるが、その輝きには、魅惑に満ちた「スキャンダラスなカロリーネ」の影もつきまといていたということである。いつの時代でも、世の才媛と呼ばれる人には、妖しいまでの魅力がただよっているものである。後のルー・ザロメのようにである。

（本学名誉教授）